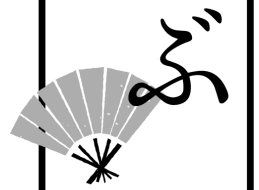


# 古典落語



## に学



落語家

立川談四楼

## 第五十四回

# 山号寺号

### 若

旦那は小僧を共に連れて浅草の観音様に向かうが、途中幫間（太鼓持ち）の一八に見つかり、遊びに連れてってくれるとせがまれる。

「今日は観音様にお参りに行くからダメだ」「偉い、浅草寺ですな」「観音様だよ」「ですから浅草寺、あれは金龍山浅草寺に安置し奉る観世音菩薩——」「別に間違っていないじゃないか。観音様を拝みに行くんだから」「まあそうなんですが、金龍山浅草寺、これがあそこの山号寺号で」「何だいそのサンゴウジゴウってのは?」「山の名と寺の名で、どこの寺にも必ずある

んです。例えば成田山新勝寺という具合に」「じゃあ寛永寺は?」「東叡山寛永寺」「増上寺は?」「三縁山増上寺とどこにもあるんですよ」「よし、どこにもあるんだな。それならここは下谷の黒門町だ、ここにもあるか。さあ探せ。探しゃあ祝儀に一回やる。なきゃあおまえは出入り止めだ」

一八は出入り止めの怖さと一回欲しさにキョロキョロと辺りを見渡す。

「ありました! あそこで俵屋さんが客待ちをしてるでしょ。『俵屋さん広小路』ってなんでしょう?」「なるほど、あったな。

約束だ、一円やるよ」「ありがとうございます。あそこの家の前にご婦人がいます。『オカミさん拭き掃除』ってなんでしょう?」「こりゃ上手<sup>うま</sup>かったね。拭き掃除か。一円やるよ」「ありがとうございます。隣がお医者さんです。『お医者さんイボ痔<sup>じ</sup>!』」「汚いのはダメだよ。きれいなのを探しな」「えーと、蕎麦屋<sup>そば</sup>さんがあります。『蕎麦屋さん玉子とじ』ってなきれいでしょ」「うん、これはきれいに決まったね。一円やろう」「ありがとうございます。魚屋さんもあります。『魚屋さんムロアジ』」「ギリギリいいだろう。一円やろう」「ありがとうございます。次はあそこの時計屋さんで。『時計屋さんいま何時?』これはいいでしょう?」「いいね。一円やろう」「ありがとうございます。では『時計屋さんいま三時』」「ダメだよ、同じじゃないか」「では肉屋で。『肉屋さんソーセージ』ってないでしょ」「こりゃいいね。何より新しい。一円やるよ」「ありがとうございます。ええ次は——」「お待ちよ一八、おまえがあんまり連発するものだからカネがなくなっちゃったよ。今度は趣向を変えて私がやろう」「えっ、若旦那が山号寺号を? これは楽しみですな、へえ伺いましょう」

一八は余裕<sup>しやうやく</sup>々です。すると若旦那が妙な提案をします。

「いまおまえにやったカネをちょっと貸しとくれ」「いいですけど、これはすでに私のカネですよ」「そんなことは分かてるよ。このカネをこうして懐に入れる」「それから?」「次に尻<sup>はし</sup>折りをするんだ」「若旦那の山号寺号は手間がかかりますな」「さあ支度はできた。ここで駆け出すんだ。『一目散(山)随徳寺』と」遠ざかる若旦那を見送った一八、「ああ『南無三(山)仕損じ』」

こ

れが『山号寺号』です。「<sup>はなし</sup>嘶が軽くて短い」のが特徴で、時間がない時などによく高座にかけられます。亡くなった兄弟子左談次の得意ネタでした。若き日の高座が目につかびます。軽いネタなのに大いに客席を沸かせたものです。「肉屋さんソーセージ」は確か左談次のオリジナルのはずです。続けて「肉屋さん魚肉ソーセージ」時おり、「肉屋さんで魚肉とはこれいかに」などと言って笑わせてましたねえ。

随徳寺を決めるとは、急いで逃げ出すことを意味します。ですからその後の「一目散随徳寺」に続く「南無三仕損じ」というオチを私は大事にしています。というのも私自身がこの言い回しを山号寺号で覚えたからです。古い言い回しも味があっていいですよ。